



しんどう中学校通信

～仲間とともに支えあい 豊かな学びと心を大切にする学校～

“まねること”は「大切な学び」

12月になり、朝晩の冷え込みを実感する頃となりました。コロナの感染に関しても「第3波の到来」とも言われ、新堂中学校においてもマスクを着用し、教室の換気や「密」を避けた生活を継続しています。どうしても気持ちも沈みがちになるこの季節ですが、前向きな気持ちをもって“この冬”を乗り切ってほしいと思っています。

「生きる力」という言葉は、文部科学省の学習指導要領をはじめ、学校教育というものを語る際のキーワードとなっています。「生きる力」を培うために「主体的・対話的で深い学び」や「アクティブラーニング」が必要であることが、今の学校教育の潮流でもあります。私自身も、受け身的な学習の繰り返しでは、脳の中がアクティブにならないこと（要は「ボーっとしたままであること」）は、経験的にもよくわかっているため大切な考え方だと理解しています。大切なものを自分の中に取り入れていく「学び」に必要なことは何だろう？と考えるとき、私は“まねをして学ぶ”ことが、たいへん重要なのではないかと考えています。



子どもたち(中学生だけでなく小学生も含めて)が、日本語をうまく自然に話したり書いたりできているのは、1歳に満たない頃から身近な大人や家族にくり返し話しかけられたり喋っているのを聞き、また書かれた文字をなぞったりすることで、それこそ“見よう、見まね”で獲得したものであると思います。幼い頃に、テキストを精読して日本語が話せるようになったという人はいないわけです。

一方、人のまねをするというのは、「所詮、人のまね」などとも言われ、ネガティブなイメージがあります。理想を言えば、自分で考え、オリジナルなものを生み出すことが素晴らしいことなのかもしれませんが、そこに至るまでには本当に長い時間が必要なのだと思います。

「守破離」という言葉を出すまでもなく、昔から日本の芸事や武道においては、師や先生から基本の「型」を教えてもらい、その型を徹底的に“まねる”ことから稽古や修行が始まっています。弟子が師匠から言われる言葉として「教えないから、盗め。まずは徹底的にまねをしろ。」といった話はよく耳にします。「同じもの」「同じこと」が出来るようになる「型」を手に入れることが大きな目標となります。盗むというぐらいの気構え(≒意欲)を持っていることも大切なのかもしれません。

社会の中では、独創性や独自性といったものが大切にされることがよくあります。少し極端な例ではありますがノーベル賞は、その分野での特筆すべき研究や業績に対して与えられている賞ですし、その人らしさや先進的な取り組みなどが評価されたものです。

しかし、そのノーベル賞の受賞者であっても個人や単独の研究・活動はほとんどないと言われています。先人や多くの仲間から影響を受け、考え方やそれまでの成果を共有しながら自らの取り組みをさらにその先に進めていったのだと思います。

「学ぶ」の語源は「真似(まね)ぶ」であると言われていています。「真(しん)に似(に)せること」を「真似(まね)」と言うわけです。うわべだけでなく、その内容や本質のようなものまでしっかりと真似ができるのであれば、それは自分自身の成長につながる「学び」であると考えることが出来ます。

しっかりと真似をすること、基礎・基本を大切にすること、同じようなことを何度でも繰り返すことの中で、結果的に自分自身の成長につながることは少なくないと思います。

“この冬”に、このような冬であるからこそ、しっかりと自分自身を鍛えてほしいと思っています。

校長 伊庭 靖二

校内合唱コンクールの様子から …11月6日(金)

今年度の合唱コンクールは感染症予防の観点から、例年とは違った形で行うことになりました。体育館に全校生徒を集めず、他学年の発表は各教室でリモートでの鑑賞ということにしました。

リモートという形ではあっても、その緊張感や各教室にも伝わったのではないかと思います。例年と比べても遜色のない素晴らしい発表であったと思います。



当日の体育館の様子です。👉

